

展覧会感想

上越市立総合博物館企画展

「生誕180年記念 前島密―越後から昇った文明開化の明星―」

荒川 将

1 前島密と生誕地上越

新潟県上越市下池部の生家跡に建てられた前島記念館の隣にある生誕記念碑「男爵前島密君生誕之処」には、日本の文明開化を率先した前島密の功績と人柄が、同時代をともに生きた人びとの言葉で刻まれている。

日本文明の一大恩人がここで生れた、この人が維新前後の国務に功績の多かったほかに明治の文運に寄与して永く後世に伝ふべきものは郵便その他の通信事業である、これまでは緩慢な飛脚便によった手紙が迅速に正確に頻繁に集配せらるるやうになり、小包郵便・郵便為替・郵便貯金の制度の出来たのもみなこの人の賜である、海運業や新聞界の先駆者であり、電信・電話・鉄道の開通の殊勲者でもあり、ことに日露役より先に敷設された朝鮮の鉄道の計画者であった、また早稲田大学・盲啞学校の教育事業や保険・海員救済などの社会的事業に対する顕著な貢献や率先して東京遷都を主張したり、維新前から漢字の廃止を唱へたほどの非凡な先見はいつまでも忘れることは出来ない、忠実で果敢で廉潔で趣味は博かった

前島密の生誕記念碑は、大正11年（1922）に当時の前島記念池部郵便局長の坂田増五郎など地元有志の尽力により建立された。碑銘は渋沢栄一が揮毫し、碑文の撰者は市島謙吉、書は阪正臣による。碑文の草案は坪内逍遙や会津八一が作成した。この記念碑は、「郵便の父」といわれる前島密が、郵政事業のほかに、陸海運の振興をはじめ、新聞、電信・電話、鉄道、教育、社会福祉など、近代日本の礎となる数多くの事業を提案し、その実現化に尽力したことを伝えている。なお、前島記念館は、昭和5年（1930）に坂田増五郎と稲田郵便局長の川崎真治らが中心となって、前島密の業績を顕彰するための記念館建設を提唱し、翌年に完成した。前島記念館と生誕記念碑の存在は、前島密と生誕地上越との関係を端的に象徴している。

2 前島密生誕180年記念展「生誕180年前島密―越後から昇った文明開化の明星―」

平成27年（2015）は前島密の生誕180年の節目の年であった。生誕地である上越市では、前島密や郵政に関わる13団体・個人が「前島密生誕180年記念祭実行委員会」を組織し、「郷土の偉人」を全国へ向けて発信する活動が行われた。また、前島密の生誕180年を記念する展覧会が郵政博物館や上越市立総合博物館（図1）などで開催された。

上越市立総合博物館では、企画展「生誕180年記念 前島密―越後から昇った文明開化の明星―」[会期：平成27年9月26日（土）から11月23日（祝・月）まで]（図2）を、公益財団法人通信文化協会および郵政博物館との共催、後援に日本郵政グループ、前島密生誕180年記念祭実行委員会の協力のもと開催した。本展では、初公開資料を含むおよそ100点を展示した。

とりわけ、共催の郵政博物館からは全面的な協力をいただき、郵政博物館・前島記念館との連携の中で展覧会を開催することができた。また、本展の関連イベントとして記念講演会を開催した。講師に郵政博物館の井上卓朗氏（郵政博物館担当部長兼首席資料研究員、現郵政博物館館長）を迎え、「青年前島密—青春の旅路—」という演題でご講演いただいた。

さて、本展の基本的な視角は、上越で生まれ近代日本の新しい国づくりに貢献した前島密とはどのような人物であったのか、どんな志を抱き、何をなそうとしたのか、そしていかなる生涯を歩んだのか、生誕180年の節目にあらためて前島密を振り返る機会としたい、ということであった。さらには、次にあげる二つの点を意識して展覧会を構成した（図3）。一つは、生誕地であり幼少期を過ごした「ふるさと」としての上越を意識し、上越とのつながりをふまえた内容とすること（象徴的な存在として母との関係を強く意識すること）。もう一つは、なぜ前島密は明治政府の中で、または明治時代に様々な分野で輝かしい業績を上げることができたのか、その原動力はどこにあるのか。青年期の前島密の動向を新たな研究成果を盛り込みながら、できる限り丹念に描きたいということである。

本展の構成は以下の通りである。第1章「前島密となる～上野房五郎から前島密へ」。第2章「『郵便の父』前島密」。第3章「前島密の多岐にわたる業績」。第4章「前島密の人となり～前島密をめぐる人びと」。ここでは、先に記した二つの点を中心にしながら本展の内容について紹介していきたい。

前島密は生涯で4度名を改めている。上越で「上野房五郎」として生まれ、江戸に出て「巻退蔵」（23歳）と名を変え、幕臣「前島来輔」（31歳）として徳川家に従い、そして「前島密」（34歳）となり明治政府へ出仕した。

第1章では、生誕から前島密となるまでの青年期を、近年の研究成果をふまえながら紹介した。前島密は、天保6年（1835）1月7日に越後国頸城郡下池部村（現在の新潟県上越市下池部）で誕生した。父は下池部村の上野助右衛門、母は高田藩士伊藤源之丞（高200石）の妹貞（てい）といい、房五郎と名付けられた。幼くして父を亡くした前島にとって、母貞は最初の先生であり生涯の道しるべのような存在であった。前島は10歳で母と別れて高田の儒学者・倉石侗窩の文武済美堂に入塾する。倉石侗窩は、町人出身ながら江戸へ遊学し、安積良



図1 上越市立総合博物館外観

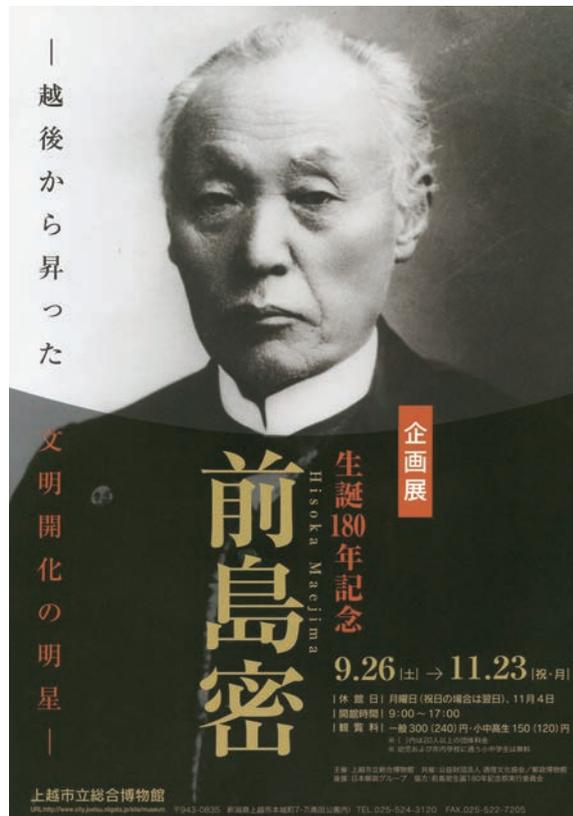


図2 展覧会チラシ

斎のもとで学び塾頭を勤めた後、天保13年（1842）に高田長門町に私塾を開いた人物である。倉石塾へは高田城下にある母の実家伊藤家から通い、しばらくして生家である下池部の上野家へ移った。12歳で江戸へ旅立つまで、下池部から倉石塾までの約7kmの道のりをたとえ雪が激しく降る日も通って学問に励んでいる。前島の人格形成には、生まれ育った雪国の環境が大きく影響を与えたものと思われる。

江戸に出た後は、18歳でペリー艦隊を目の当たりにしたことで大きな衝撃を受け、「国防」を考えるため全国の港湾や砲台を見聞する旅に出る。青年期の前島は、学問の師を求めて全国各地をめぐり、学問を通じて出会った様々な人物との交流が大きな財産となった。安政2年（1855）5月には江戸の儒学者安積良斎の門人となるが、この事実は近年の研究で判明した成果であった。幕府の昌平坂学問所教授などを勤めた安積良斎の見山楼には、長州藩の吉田松陰や高杉晋作をはじめ全国各地から身分を問わず多士済々の入門者が集まり、門人は2,280人を数える。前島と同時期には土佐の岩崎弥太郎も入塾しており、近代日本の海運業を発展させた二人の出会いが確認できる。本展では安積国造神社所蔵で福島県指定文化財の「安積良斎門人帳」をはじめて展示した。安積良斎自筆の門人帳で「上野房五郎」と記された部分を展示することができたのは、本展の趣旨にご理解をいただいた安積国造神社宮司安藤智重氏のご厚意によるものであった。あわせて、安積良斎が前島に贈った書も展示したが、「中庸」を揮毫した書からは、良斎が「上野房五郎」を高く評価していた様子がうかがえる。

さらには、大政奉還後の時勢を見極めた「領地削減の儀」や「江戸遷都論」などの建言を行った幕臣としての前島密について、戊辰戦争後の駿府藩公用人や遠州中泉奉行などの要職を重ねた静岡時代の動向を中心に紹介した。特記すべき事項としては、中泉奉行時代に災害などで困窮する人びとを救済する仕組みを地域の寺院の協力を得ながら制度化（中泉救院）したことと、東海道の河川を結ぶ運河を掘削して新たな水運（舟路）のルートを作る計画書「東海道中舟路之概略」をまとめたことである。この計画書は、海路の難所である遠州灘を迂回するルートが企図され、工事計画や経費の計算も細かく検討された内容で、前島が明治3年（1870）に明治政府へ提出した日本初の鉄道敷設に関する建議書「鉄道憶測」のベースになったものと近年の研究で明らかにされている。静岡時代に為した業績についてはJ R磐田駅前の前島密像が長く地域で評価されていることを現している。

前島密は、明治2年に明治政府へ出仕し、民部省の改正掛に抜擢されると、明治日本の新しい国づくりに尽力していく。第2章では、郵便創業と郵政事業の発展に貢献し、「郵便の父」といわれる業績を紹介した。郵政博物館所蔵の「正院本省郵便決議簿」や郵便開業を知らせる「太政官布告」などの文書類、郵便創業を実現したころの前島密肖像写真（30代半ば）などを中心にしなが、万国博覧会へ出品された「郵便取扱の図」・「郵便現業絵巻」や「郵便貯金奨励双六」などの絵画資料、「書状集め箱」・「黒塗柱箱」などの立体資料、郵便配達員の制服類（レプリカ）などを展示し、視覚的にも分かりやすい内容を心がけた（図3）。日本における近代郵便制度は、宿駅制度や飛脚制度などそれまでの仕組みや人材を積極的に活用した前島の手腕に拠り、短期間で欧米諸国と同じように誰もが簡単に利用できる公共通信手段として制度



図3 展覧会会場風景

化された。

第3章では、前島密の多岐にわたる業績について、陸海運の振興、通信・電気、教育、上越ゆかりの事柄に大別しながら紹介した。前島は、明治十四年の政変（1881）で大隈重信らとともに下野するまで、大蔵省や内務省の任とあわせて明治政府では一貫して逓遞（郵便・交通・運輸を統括）の長官を勤めた。前島の手元に残った数多くの辞令書類は、物流や通信の分野でも近代的な新しい仕組みを作り上げる政府の責任者であったことを物語っている。近代日本の陸海運業は前島の建言によって大きく発展していくが、青年期に陸海から日本全体を見渡した経験こそ、前島の広い視野と深い洞察力の根本であったと思われる。

前島密は、教育分野においても数多くの事業を実現した。幕末に「漢字廃止」を建議したのはじめ国字改良に取り組み、明治37年（1904）には帝国教育会から40年来にわたる功績を称えられた。また明治9年（1876）には視覚障がい者の教育を目指す楽善会に入会し、私費を投じて訓盲院を設立し、商議委員として東京訓盲院の運営に長らく力を尽くした。さらに、東京専門学校（後の早稲田大学）の設立に参画し、2代目校長も勤めた。ここでは、明治十四年の政変後の前島が、政治活動ではなく教育分野において大いに力を発揮した姿を紹介した。

あわせて、上越ゆかりの事績として、前島の手元に大切に残されていた故郷とのつながりを示す資料（郵政博物館所蔵「玄藤寺ほか石油場略図」、「北越鉄道関係資料」、「春日山神社建設主意書」、「別派請願ニ関スル東本願寺交渉手続（浄興寺）」など）を紹介した。北越鉄道（現在の信越本線の直江津～新潟間）の創設については、明治27年（1894）に創立委員長に推されるなど中心的な役割を果たしたことが知られる。また、上杉謙信を祭神とする春日山神社は、明治38年（1905）に高田藩士であった小川澄晴（児童文学者の小川未明の父）が謙信の遺徳を慕い創建した。明治25年11月付の「春日山神社建設主意書」からは、小川澄晴が作成した主意書原文を前島が修正している事が確認でき、春日山神社の創設に深く関わっていたことが判明した。そのほか、上越学生寄宿舎（当初は「上越学友会仮宿舎」、後の財団法人上越学生寮）に関する多数の寄付金領収書からは、前島が明治38年の設立当初から資金を援助し、学生寮の運営を支えていたことが分かる。上越出身の学生が共同生活によって切磋琢磨した上越学生寮は、約1,000人の人材を世に送り出し、平成12年（2000）に100年余りの歴史に幕を閉じた。

第4章の「前島密の人となり」では、家族との集合写真、母貞に関する前島自筆の書簡、子供たちに宛てた書簡など、前島の人柄を偲ばせるゆかりの品々を展示した。前島の雅号の一つである「鴻爪」については、「余が自ら鴻爪と号せるは雪泥に印せる鴻の爪痕の、争でか久しく存すべきと観念せるに依るなり」と号する理由を記している。また、前島の養女格として育った小山まつ子（「夏は来ぬ」を作曲した小山作之助夫人〔上越市大潟出身〕）へ教えとして語った「縁の下の力持ちになることを厭うな、人の為によかれと願う心を常に持てよ」という言葉は、前島の信条として必ず紹介される。この一文は、「鴻爪」とともに前島の人となりを連想させる象徴的な言葉といえる。

また、本展の見どころの一つであった母貞に関する前島自筆の書簡二通（母を東京へ呼び寄せる時の書簡、母が逝去した時の書簡）は、母を想う前島の心情が記されていて、母の存在の大きさを感じさせる。明治3年5月21日付で母貞の再婚先である井澤家（上越市）に宛てた書簡（郵政博物館所蔵）には、孝養の道を尽くすため母を東京へ呼び寄せたいこと、上京の時には武家の作法に則り駕籠を仕立て供は帯刀の上、衣服が見苦しくならないように配慮してほしいこと、さらには高田の伊藤家（母の実家）や下池部の「泰輔」（生家である上野家、「漢字廃止論」のきっかけにもなった前島の甥）とも相談してほしい旨が書かれている。この書簡は、前島が逓遞権正として郵便創業の立案を行っている只中の時期に書かれており、母を気遣う想

いととも、明治政府に出仕し勇躍する前島の姿を想起させる。前島が「明治三年冬、初めて母を東京に迎へ、深川木場に別宅を設け、安居養老せしめし」（『鴻爪痕』5頁）と述懐するように、明治11年（1878）9月に母が逝去するまでの短い期間であったが、母の晩年は親子一緒に暮らすことができ、前島も母への孝養の道を叶えることができたのである。明治11年9月8日付で井澤治右衛門に宛てた母逝去を伝える書簡（井澤文夫氏所蔵）には、母が前日7日に亡くなったこと、真宗の信心が深かった母の遺言に従って葬儀を行ったことなどが書かれている。この書簡からは、母を東京へ呼び寄せることを承諾してくれた井澤家に対する礼節とともに、逝去した母への想いを感じさせる。

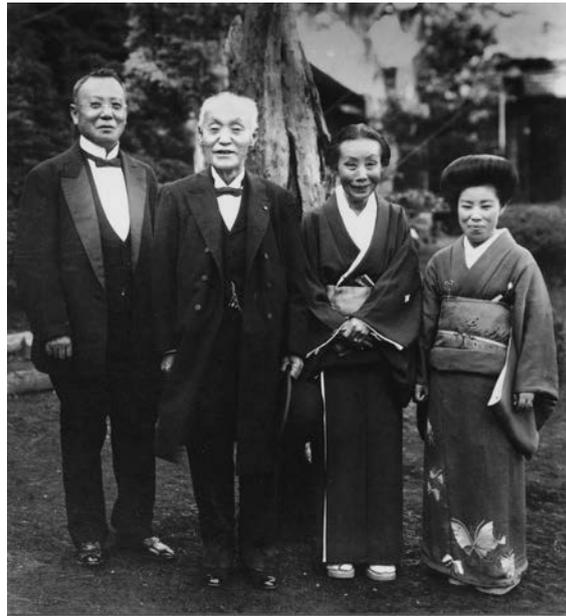


図4 前島密翁御夫妻と長男弥氏御夫妻

そのほか、前島所用の尺八や前島自筆の書画など幅広い趣味に関する資料や、前島のはにかんだような笑顔が印象的な家族との集合写真（図4）などを紹介した。

大正5年（1916）7月に前島の傘寿を記念して製作された前島密寿像が、逓信省の構内に建てられた。記念式典では、逓信大臣の箕浦勝人の祝辞に続き、内閣総理大臣の大隈重信、渋沢栄一の演説が行われ、前島の功績が称えられた。この銅像は、現在上越市の前島記念館前に移設されている。本展では、結びとして生誕地の前島記念館と生誕記念碑を紹介し、前島密と生誕地上越とのつながりを改めてふり返った。

なお、本展の内容については、刊行した展覧会パンフレット（頒布価格500円）を参照いただければ幸いである。

3 むすびにかえて

前島密は、大正8年（1919）4月27日に神奈川県西浦村（現在の横須賀市芦名）の別邸・如々山荘で84歳の生涯を閉じる。如々山荘は、浄土宗の古刹・浄楽寺の境内にあり、自然に山を成している地形の上に建てられ、山上からは相模湾を見渡せ、水平線に太平洋の蒼海が広がる。前島の墓所も浄楽寺にあり、衣冠束帯姿の前島密像を戴いた墓で、前島夫妻は静かに眠っている。

明治日本の文明開化を牽引した前島密は、激動の幕末・明治という時代において社会全体がより便利に、より快適になる方法を陰ながら提案し続けた人物であった。そして、生誕地であり幼少期を過ごした上越こそ前島密の原点であり、まさに前島密とは「越後から昇った文明開化の明星」といえる存在だったのではないだろうか。展覧会のタイトルそのものが、本展が導いた一つの回答である。

平成31年（2019）、前島密の没後100年を迎える。資料的な制約があることを鑑みながらも、今後、本格的に「前島密」研究を深め、一層進展させるためには、『鴻爪痕』の記述を可能な限り一次資料で裏付けていくこと、前島密が関わった人物や事業に現れる前島の動向や同時代的な評価を丹念に抽出していくこと、そして前島密がどのような志でそれらの事業に関わり、

各事業を実現していったのかを実証的に明らかにすることが求められる。それらを一つ一つ積み重ねることによって、日本近代史上における「前島密」の評価が定まっていくことを願ってやまない。

最後に、本展覧会を開催するにあたり、多大なるご支援を賜った公益財団法人逓信文化協会、郵政博物館様をはじめ、貴重な所蔵品を快くご出展いただきましたご所蔵者の方々、ならびにご指導・ご協力を賜りました関係者の皆様に厚くお礼申し上げます。

(あらかわ まさし 上越市立総合博物館 主任 [学芸員])